

NO.3

昭和61年(1986)9月20日

編集・発行

津田左右吉博士顕彰会  
広報委員会

(美濃加茂市下米田町則光)  
TEL 0574-25-2714

### 博士の信念を造形化

## 記念碑を建設

生涯のうちに自分の身長と同じほどの原稿を積み重ねた——。学問に一生をささげた津田左右吉博士には、ごんなエピソードが残っています。

津田顕彰会では今年度、そんな博士の志を形にあらわそうと石造の記念碑(モニュメント)を建設することとなりました。場所は護岸堤防建設に伴って移転新築(市内太田町飛鹿)される図書館前です。制作は市内太田町在住の気鋭の彫刻家・佐光庸行氏に依頼、図書館のオーブンにあわせて来春三月頃完成の予定です。

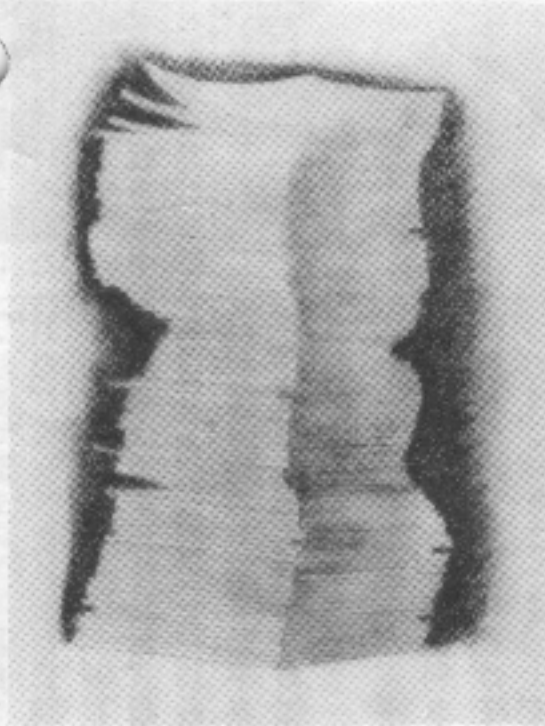
「著述千秋功未了」——博士の学問に対する情熱を造形化したモニュメントは新図書館のシンボルとして次代を担う子どもたちをはじめ、多くの

市民に親しまれていくものと思います。

今年度事業として顕彰会では記念碑の建設の他に、昨年度はじめて行った「津田左右吉賞」の作文募集を引き続き計画しています。これは博士の信念を後の世に伝え、児童・生徒の健全な成長を願って設けたものですが、

近く今年度の実施要項を作成し、昨年以上の応募を呼びかけていく予定です。発行は来三年目

を迎えた顕彰会は、568名の会員をもって各種の記念事業をはじめさまざまな活動を行ってきています。今後さらにひとりでも多くのみなさんに理解をいただいて、現在の輪をもっと大きくしていきたいと考えています。



記念碑イメージスケッチ

### 初任の頃の津田博士についての思い出

大澤 功

戦後間もなく、下米田に新任教師として赴任した私は、宿直の晩、職員書棚から、ブックジャケットに入ったま、の「儒教の実践道徳」という岩波全書を発見した。

戦争中の出版物は、整理されて、殆ど学校から姿を消していた時に、十六年出版の本書が残っていることに先ず

不思議さを感じた。目次、内容をべらべらと頁をくって奥付けを見ると「寄贈、著者」と万年筆でしたためられた博士ご自身の署名が眼にとまった。

学生時代に、学徒動員先で空襲の合間に投げ売りされて買った本の中に「支那思想と日本」(岩波新書3)があっ

て、長時間のB29の空襲の折に防空壕内でこれを読んだ思い出がある。

津田博士の著書を読んだのはこれが最初であったが、「儒教の実践道徳」は、これより難しく、読んでは見たものなかなか大要すらつかめなかつた。

大すじは「忠孝の道徳というものが、もとは封建的権力に依存していた知識階級の所産であつて、民衆とはかかわりがなく、現に儒教の思想では、民衆は動物に近いものとされ、道徳をもって導くことのできないもの、刑罰をもつてのぞむべきものとされている。」と述べられていたが、私には全くの驚いた、斬新的な考えに思われた。

この著書や他の博士の主要な著書のご研究のお考えは、当時の国粹主義者にとって心よいものでなかつたこと

は、昭和十四年末「原理日本」臨時増刊号で、養田胸喜らによって「津田左右吉氏の大道思想」として、不敬罪で告発を受けられたことにも明らかである。

これにくらべて「支那

思想と日本」。「わが国は支那思想を如何に受け入れたか。」「東洋文化とは何か。」等について述べられ、戦争さ中に夢中になって読んだものでした。

下米田中学校々舎の竣工記念行事として、文化祭を催し、当時下米田小におられた渡辺讓先生のお宅から、博士の小学校時代の卒業証書、東京専門学校（現・早稲田大学）の卒業証書、優等賞状等を拝借して展示し、それに博士の略年譜をつけ、手元に集められた著書をも加えて、下米田のご出身であることを紹介した。

（全集二十四巻付録三頁の卒業証書の四隅が破損しているが、その時の展示のあとである。）

この展示コーナーは当時の村民に、大きくアピールした



書齋でくつろぐ津田博士

ようで、ひとしきり話題にされた。

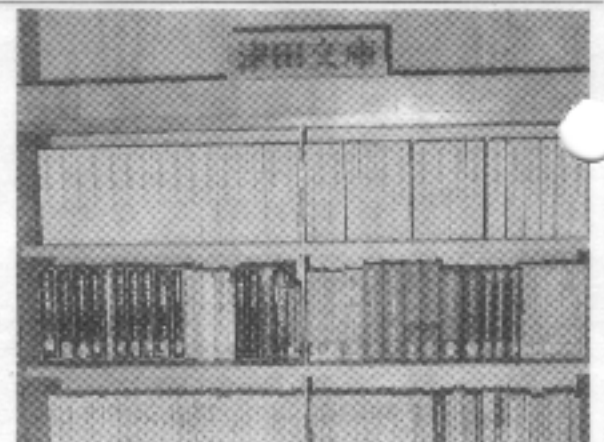
博士は二十三年二月、母堂勢以さんの病篤しの知らせに、疎開先の、岩手県平泉より、信友に御見舞のためご帰郷になった。

七十五才の老博士が、平泉から、すしずめの満員列車にゆられながら長旅を続けておいでになったことは、大変なご苦勞であつたに違いない。

その折、村有識者や博士ゆかりの人々が集まって、小学校で、博士から講話を聴く会をもたれた。

博士のスピーチの後、二、三人の村人が質問をされた。当時は、米軍の占領下で、GHQ（連合軍最高司令部）の占領政策によって、日本民主化のため、修身、公民、歴史、地理の授業が停止されていた。

こうした状況の中で、博士への村人の質問は、「なぜ、日本人が日本の歴史を教えることができないか。」「国旗の掲揚はなぜ許されないか。」「歴史学者として博士はこれらのことをどうお考えですか。」等の、素朴な疑問を表明



津田文庫

したものであつた。

また「東栃井での少年時代どんな生活をされたか。学校は何処へ通われたか。」なども話題として出された。

翌二十四年、岩波書店から「思い出すま、」を出版された。その一部に「子どもの時の思い出」を詳しくお書きになったのは、ご帰郷の折の村人達の質問がきっかけになつたのではないかと私は思う。

この時も真新しい新刊書を学校宛送っていたのだ。

私も、明治初年の下米田の教育事情や子どもの生活振りを手にとるように読みとることができた。

で、先の思い出の記とともに自叙伝の一部として載せられている。

発刊の度にご自身の署名入りで、母校に寄贈されていたようですが、高名な博士の著書で貴重な贈りものだという認識が受けとる側に充分でなかつたように思われる。

「私の書は内容が皆さんにわかりにくいかも知れないので、手もとにあるわかり易い蔵書を寄付しましょう。」といつて、その後送られてきたのが現在の津田文庫の図書ではないかと思う。先般の顕彰会の折、懐しく拝見しました。

その中に博士の手控本「古事記及び日本書紀の新研究」があり、各頁にわたつて、ペンが入れられて訂正されたのがあつた。

博士は一度出版されるとその書を丹念に読み直され、加筆訂正をされて、次の刊行にそなえられたようである。

びっしり書き込まれた一言一句に、博士の学問研究への厳しい態度がにじみ出ているように思われて、思索に思索を重ねて、推敲された様子が読む者に深い感銘を与えた。

## 子どもの時のおもいで 記より甦る在りし日の 左右吉像

諸橋彩子

今尾藩の武士であった津田家が、主家の領地であったヨナダに「帰農」し、名古屋から移り住んだのは明治二年のときでした。明治六年に生まれた左右吉にとってヨナダはふるさとの地になりました。

天賦の才能に恵まれ向学心に燃えた左右吉は、十三才で離郷し、学問の道を貫く生涯を異郷で過ごされましたが、故郷をあとにした誰もが抱く望郷の念は年を経るにしたがい強くなるものでして、津田博士も七十六才にして「子どもの時のおもいで」を著されています。

文面は、ふるさとへの思慕と幼き日の回想が生き生きと描かれ、在りし日の左右吉と少年を育んだヨナダの風物が鮮やかに甦ってきます。

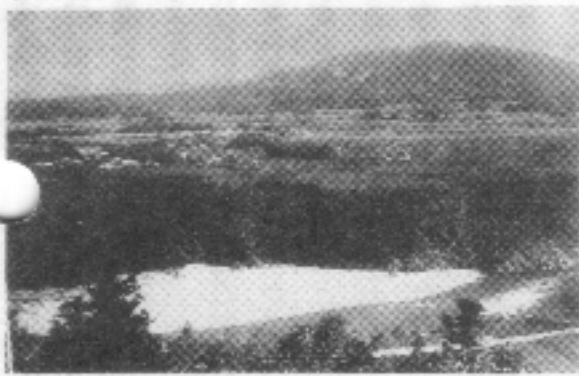
「村の外へでたこともあまりない」という少年の目に映った日々を、学校での生活、父母やおばあさんとの思い出、おスワ祭り、どんど焼、蟲おくり、お百度まいり、小山観

音などの年中行事から春夏秋冬自然の有様を、その温かい人柄と歴史学者としての確かな目を通して語っています。

「村のすぐ下にヒダ川の渡し場があり……朝はヒダ川を下る川舟の櫂の音がした」

「冬の朝にはアサフ(麻生)から川を下ってくる筏が……カッパのようなものに着た筏のりがその上に乗って櫂をかじをとる……その筏のりが櫂を肩にかついでヒダ街道をかみのほうに帰ってゆくのをしばしばみたことがある」

左右吉の過ごした川岸に住み朝夕川音に親しんで生活する私は、おもいでの記事をたどり川辺に佇み往時の賑わいに思いを馳せましたが、おばあ



昭和13年頃の下米田 (間宮瑞夫氏提供)

さんと一緒に渡し舟でカワベに行ったという少年の姿、釣り好きであった父親について行ったという岩場、夏になると子どもの泳ぎの場であったという川の流れは、悠久の歴史を秘めたまま何も語ってはくれません。

ただ、つい先頃迄は、私達の子どもにとっても泳ぎの場として親しんだ場所であり、禁泳となった今では、釣り人が川を下って行く姿だけになり人の世の移ろいをしみじみと思うばかりです。

凡庸な身には、近代史学の父として仰がれる博士の偉業の一端をも理解できませんが博士のふるさとを想う気持のあふれる心情を読むうちに高潔なる学問の徒として敬愛された人柄は、幼少年期を過ごした子ども時代の風土によって育まれた感性によるものであるとの感を強くしました。

ふるさと人である私達誰もが、博士への敬愛の念を抱くことができますように、まず「あなたは津田左右吉を知っていますか」に答えることができるような顕彰活動が望まれてなりません。

「続おもひだすま、」の第一項に、玉蟲と題する優美な随想がある。昭和二十五年、疎開先の平泉から、武蔵野市境の邸宅へ移られた其の秋、

「ある朝、庭の片すみの雑草の間に美しく光るもののあるのが目についた。ひろひ上げて見ると玉蟲のやうである。子どものとき、母の鏡台の引出しの中に、きれいな色の羽のついた、こがね蟲を大きくしたやうな形の、蟲の乾いたのがあるのを見て、何かときいたら玉蟲だと教へられた。」

## 母への思慕

……中略……  
ところがこゝに移った時、ひっこしの荷物の中に一昨年亡くなった母の遺物の手ばこがあったので、それをあけて見たら、思ひがけもなく、七十年あまりの前の見おぼえのある玉蟲が出て来た。

……その鏡台はどうしたか知らぬが玉蟲だけは年とった後までも持ってたと見える。今ひろったのをそれと比べてみると、全く同じである。青みの勝った濃い緑に赤く緑どった紫色の筋がとほつてゐて、全体が黄金の光のやうなか

やきをもつて、その美しさは、七十余年の前か或はもつと前かのも今のも変りはない。」

「かなり前に玉蟲の厨子が日本で作られたものか半島から来たものかが問題となり、それにつれて朝鮮に玉蟲があるかあるかが話のたねになったことがある……」と、学問研究のひらめきが一部に記されてゐる。

公 として文章で記述されてゐるが、そこには母への慕情がにじみ出ており、七十を超された博士が、さながら童心に返った気持で母を偲んで居られる姿がほうふつとして眼にうかぶ。

### 追記

博士の本領である学問研究の著述は、註釈がなければ読解の出来ぬこともあり、論旨が緻密で、こみいっている為、仲々読みづらいのですが、随想、日記外平易な論叢も数多くあります。博士の文章に少しでも親しみをもち、その高潔な人格に触れていただけたらと思ひ、冗長ではありますが原文そのままを摘出転記しました。

## 「自由と不自由と」 を読んで

牧 玲子

大学者であり、思想家であった津田博士の広く深い研究は、私共には難しく、読み辛いのですが、「これを読んでみたら」と尾関先生が、お奨めくださったのは、昭和三十二年十月に、自由学園で講演された「自由と不自由と」の一文でした。

自由とは自分の我が儘勝手とは違う。自分のしたい事をするのは自由ではない。個人の自由を守るといふ事は多勢の人が協同して仕事をする事になる。協同の精神あつて初めて個人の自由がある。不自由とは我が儘勝手が出来ない事であり、それはその儘自由なのだと言うくだりで始まり、愛国心へ戦争へと移り本当の平和とは、という具合に展開していきます。愛国心の所で、与謝野晶子の「君死にたもふことなかれ」は国民全体が協力し事に当っている時一身の事情で協力を拒む事であり、作者の懐いてゐる密かな願望を述べた物としては同情すべきだが極めて不当であると述

べら。比べて森鷗外の「そお眺めやる束の間は、情も仇も消えはてて同じ列なる新墓に同じ涙を注ぎけり」と言乍ら「わが仮りそめの事くさは巷に説かん道ならず」を引用して戦陣の折りはかような心遣いが必要と評価しておられる点面白く読ませて頂きました。

今昭和還暦を迎え戦争経験のない者の手に世代は移りつつありますが、その一面まだ

多勢の残留孤児が肉親を求めて訪れています。それはまだ戦争が終りを告げていない事でもあります。21世紀を担う若者は美食に溺れ、何か好い事ないかと欲求のみが渦を巻き、目先の変わった事に飛びつき街頭で踊り狂うストリートパフォーマー・マンス集団を作っています。その行動は幼児の如く、堅実な思想判断もなく、こんな様子を博士がご覧になったら何とおっしゃるでしょう。